

□巻頭言□

「国際医療福祉大学学会誌の発行にあたって」
—学会と学会誌のもつ意義—

国際医療福祉大学 学長 北島 政樹

国際医療福祉大学は平成7年に医療・福祉の総合大学として保健学部が最初に創設された。その後、高齢化社会という時代背景の中で各学科におけるオピニオンリーダーである教員の存在ときめ細やかな教育、および良好な教育環境の充実により、著しい発展を遂げ、栃木においては医療福祉学部および薬学部の増設、小田原キャンパスに保健医療学部、福岡天神キャンパスに看護学部、そして大川キャンパスにリハビリテーション学部が次々と新設された。今や6学部15学科で6,000人の学生を擁する大学にまで成長した。国家試験合格率や就職率は常にトップクラスにあり、それらの評価により、朝日新聞の調査による国公立大学750校において33位にランキングされるに至った。

このような急成長の中で更なる発展を展開するためには各キャンパス間の密なる交流が必要となる。

しかしながら、各キャンパス及び関連病院間の全体会議は月1回開催される管理運営委員会であり、各施設の情報交換や研究成果の共有は十分とはいえない。

しかし、最近になって小田原・大田原キャンパスの教員・学生間の交流がセミナーハウスの新設を契機に行われるようになった。

平成21年7月より谷修一名誉学長の後任として学長職を拝命したが、まず最初に考えたことは各キャンパスの教職員の心を一つにすることであった。

小田原キャンパス、福岡天神キャンパスを手始めに各学科教員との意見交換会、また大田原キャンパスでは学部長・学科長との面談などを行い、また各キャンパスにおいて各学科より講師、准教授など比較的若い教員を推薦していただき、将来構想委員会を設置した。本委員会では本学におけるアクションプランおよび中期計画の議論が行われた。その議論の中で、特にアクションプランにおいて、当然、各キャンパス間における交流やカリキュラムの統一化などが話合われたことは、いうまでもなく教員の願いでもあった。

このような議論の最中、私の前任地の医学部創立の話思い出した。1917年医学部の新設を依頼された北里柴三郎博士は、ドイツのロバートコッホ教授の薫陶を基に「我が新しき医科大学は多年医界の宿弊たる各科の分立を防ぎ、基礎医学と臨床医学の懸隔を努めて接近せしめ、融合して一家族の如く」という建学の理念は、本学の現状を彷彿させるものである。

各キャンパスが心を一つにすれば、本学の更なる発展が期待できる。そこで個々の教員のもつ優れた技術や知識を共有するために一堂に会し、発表する機会が必要と考え、国際医療福祉大学学会の設立を決心したわけである。

その後、学部・学科長会議や管理運営委員会で提案したところ全員一致で承認され、設立作業に取り組むことになった。

大田原キャンパス保健医療学部長丸山仁司教授も以前から学会設立を望んでいたようであり、第1回国際医療福祉大学学会学術大会の会長をお願いした。

丸山会長を中心に学会役員メンバーの選定や定款の作成なども順次行われ、各キャンパスや関連病院・施設のみならず、多くの病院・施設より、208題もの演題の応募があった中、2011年9月2～3日の2日間にわたり大田原キャンパスで、国際医療福祉大学の絆の具現化の第一歩を踏み出すことができた。

更に学会の設立と同時に併行して学会誌の在り方についても「紀要」編集委員長の山本澄子教授を中心に熱のこもった議論が行われ、内容や投稿規程の詳細が制定された。本誌のロゴマークも一般募集で応募いただいたものである。

将来的に本誌は全会員に配布され、本学に関する情報の共有ツールとなることを願っている。また会員からの多くの優れた内容の学術論文や学位論文が投稿され、より質の高い学術誌として、また医療福祉の専門誌としてこの学問分野で認知されることを切に願う次第である。

稿を終えるに際し、国際医療福祉大学学会設立の趣旨をご理解いただき、ご支援を賜った高木邦格理事長、第1回学術大会を成功裏に導いていただいた丸山会長と理学療法学科の先生方、および「紀要」から「学会誌」への移行をスムーズに対応してくださった山本澄子編集委員長と委員の先生方には紙面をお借りし、衷心より感謝と御礼を申し上げる次第である。